月 横浜OB小川龍馬さん 青年海外協力隊でセネガルへ

週刊報知 高校野球

◆小川　龍馬（おがわ・りょうま）1991年9月25日、神奈川・平塚市生まれ。26歳。横浜高では1年春からベンチ入り。50㍍走6秒ジャストの俊足を武器に、2年だった08年には春夏の甲子園に出場。明学大法学部を卒業。約70日間の語学研修を経て、15年1月にセネガルへ派遣。17年1月に帰国し、4月からは明誠（島根）で社会科教師、硬式野球部コーチ。

小川さんはセネガルの子供たちから「リョウマ」と呼ばれ愛された

◆セネガル共和国　西アフリカ、サハラ砂漠西南端に位置する共和制国家。面積は日本の約半分。人口は1513万人（15年）。首都はダカール。気候は、熱帯乾燥気候で7月から9月の雨期と10月から6月までの乾期に分かれる。公用語はフランス語。

小川さん（左から2人目）はセネガルで野球の伝道師となった

筒香と共に戦った男 ゼロから伝えたベースボール

最初2、3人

不安はすぐに現地の人が消し去ってくれた。町を歩けば声をかけてくれる。食事はみんなで仲良く大皿でつついた。魚を蒸した料理や、米にたまねぎソースと野菜を組み合わせた脂っこい〝国民的料理〟に「おなかが弱いので少し困った」。体当たりで臨めば、誰もが温かく心を開いてくれた。

野球道具は日本から送った。仲間に呼びかけ、グラブ約50個、バット約30本、ボール300球が集まった。さあ、野球をやろうぜ。それでも当初は2、3人が来るか来ないか…。アウトの意味さえ分からない子どもたちへ、まずは打って投げることの楽しさを味わってもらった。

変な遊び認知

すると次第に子供たちの間に「あそこに行くと、変な遊びができるらしいぞ」とのうわさが広まっていく。7歳から15歳まで、約15人のメンバーが集まった。「リョウマ」と呼ばれ、一緒に汗を流した。「変な遊び」は日を追うごとに「ベースボール」へと認知され、おのずと「リョウマ」の知名度も広まっていった。

17年1月、セネガルを去った。「また来るね。忘れんなよ」。互いに涙はなかった。現在は後輩が、小川さんの後を継いでいる。ワッカムの有名人になった「リョウマ」の野球塾は今も続く。セネガルにまいた野球の種がいつか芽を出し、美しい花を咲かせることを、遠く島根の地から祈っている。

出発前「お互い頑張ろう」

帰国した小川さんは今、ゆかりのない島根の私立校・明誠で「常識にとらわれない新しい野球」を実践するために奮闘している。

明誠にやってきたのは、自分の考えを受け入れてくれたからだという。「注目度の高い高校野球で、固定概念を覆したいんです」。体が小さいからホームランバッターになれないーではない。全員に可能性を与えるため、ひたすらバットを振らせている。「三振を27個しても、ホームランが一発出ればOK。打てたらうれしいじゃないですか」。何よりも楽しさを伝えるのは「長く野球をやってもらいたい」との願いからだ。

自身の横浜高時代は厳しい練習で「勝ち」にこだわり、2年の春夏、甲子園に出場した。「甲子園に出た達成感が強かった。やりきった」と高校で選手生活を終えた。明学大では神奈川屈指の進学校・湘南のコーチを務めた。部員の一人には今秋ドラフト候補左腕・東大の宮台康平（4年）も組む姿勢を見て、将来、大物になるという予感がありました」。湘南球児が笑顔で白球を追う姿に、「野球を楽しむ心」を強く思い出した。将来は野球の指導者になることを決めた。

高校ではDeNA・筒香＝写真＝と同級生。小川さんが不調の時は、いつも筒香がアドバイスをくれた。セネガルへ出発前も口数の少ない男が直接、「お互い頑張ろうや」とエールを送ってくれた。「彼も子供が好きで、接している時は子供のような顔をする」。仲間は今でも初心を呼び起こしてくれる存在だ。

小川さんには夢がある。野球を通じて国際交流を進め、選手の人生の懸け橋になることだ。「セネガルで教えた子が留学生として、明誠野球部に来てくれたらうれしいですよね」

1月帰国後島根・明誠コーチ

名門・横浜高で08年の春夏甲子園に出場した小川龍馬さん（26）は明学大卒業後、青年海外協力隊として15年1月から2年間、セネガル共和国で野球普及活動に携わった。「ベースボール」の言葉すら伝わらなかった土地で、子供たちへ一から野球を教えた。帰国後は明誠（島根）のコーチとして、若き力の指導に情熱を注ぐ。アフリカの地で野球の魅力を伝えた、熱き日々を振り返った。（小林　圭太）

砂利にゴミ……

セネガルの首都・ダカールといえば過酷なモータースポーツ「ダカール・ラリー」の終着点としても知られる。小川さんが野球普及の地に選んだのが、このダカールのワッカムという地域だった。野球の認知度はほとんどない。

「野球を知らない国に広めたいと思ったんです。野球を通じて人生の選択肢を増やしてあげたいと思いまして」

近所のサッカー場の脇にある縦40㍍、横20㍍のわずかな長方形のスペース。ここで小川さんは週5回、子供たちに野球を教えることを決めた。グラウンド内にはゴミの山もあり、質の悪い砂利や石が転がっていた。

「打球の方向がしょっちゅう変わります。でも、もっと悪い状況を想定していた。砂漠地だってありますから。ボールが転がればありがたいです」

俺も楽しさを

青年海外協力隊に入ったきっかけは、高1の時にやってきた教育実習生だった。当時、何げなく「ブラジルに行きたいんだ」と話していた。数年後、その実習生がWBCブラジル代表のコーチを務める姿をテレビで目撃した。「すげえ…。あの人、本当にやったんだ」。オレも野球が発達していない国に行って、未来のある子どもたちへ野球の楽しさを伝えたい―。入隊し、初の海外へ飛んだ。

異文化コミュニケーションは言葉だけでなく、ジェスチャーも有効な手段だ

フロンティアスピリット再沸騰

取材後記

フロンティアスピリットの持ち主とはこの人のことだろう。何もないところから新たなものを生み出す。「何も志無きところに、ぐずぐずして日を送るは、実に大ばか者なり」。坂本龍馬の名言だ。父が龍馬好きで名付けられた名のごとく、小川龍馬さんは、志を持って自ら道を切り開いた。2時間の取材の中で、私の中に眠っていた開拓精神が再び沸騰した。今の仕事でも生きいきはず。いまだ世に出ていない情報を見つけ出し、発信する。ルーキー記者として〝フロンティアスピリット〟を大切にしたい。

（野球担当・小林　圭太）

月報知高校野球火まるごと百人 水フィッシング報知木シネマの小箱金BOOKセレクト土ニュースセンター日エンタメ報知

「報知高校野球」11月増刊号発売中

清宮弟福太郎 独占インタビュー

高校野球専門誌「報知高校野球」11月増刊号「清宮幸太郎3年間の軌跡」が全国で発売中です。コミック誌「モーニング」に大好評連載中の高校野球漫画「バトルスタディーズ」作者なきぼくろ氏が描き下ろした清宮と広陵・中村奨成のイラスト表紙に並ぶ目玉は、調布シニアでプレーする清宮の弟・福太郎（早実中2年）の独占インタビュー。兄のこと、両親のこと、そして自身のことをたっぷり語っています。

ホームラングラフ、語録、3年間のフォトギャラリー、プロ入り表明会見の誌上完全再現に加え、元ヤンキースの松井秀喜さんからのエール、世界一になった東京北砂リトルから調布シニアまでチームメートだった親友からの手紙も掲載。高校通算111本塁打リスト、公式戦全打席成績も収録し、永久保存版に仕上がりました。

創刊40年目にして初のオールカラーページを実現。ぜひ、お近くの書店またはマガジン報知でお買い求めください。YC（読売新聞販売店）にも注文できます。

（編集長・日比野　哲哉）